

トルコ農村社会における女性の劣位性とジェンダー分業 “アユップ”の行為をとおして

星山幸子*

Female Inferiority and Gender Division of Labor: “Ayıp” (“Shamefulness”) in Turkish Rural Society

HOSHIYAMA Sachiko*

Abstract

In this paper, I examine a vicious circle in which women are hired at the lower level of agricultural work in Turkey. The gender division of labor in agriculture is influenced by the inferior status of women in the socio-cultural structure as well as by a structural change of agriculture. I especially focus on the discourse of “ayıp” about which cotton picking laborers talked during my fieldwork in Adana, Turkey in 1996 and 1997. Three issues are discussed as follows.

First, gender roles in agricultural work have been changed by a structural change of agriculture in Turkey, which began in the 1950's. It has made the gender division of labor distinct so that men do mechanized work and women do manual labor. Additionally, such a gender division of labor regulates people's acts because they believe that it is “ayıp” (shameful) that men do women's work. Secondly, the high illiteracy rate of women in southeastern Anatolia where cotton picking laborers come from seems to be determined by people's negative thoughts regarding girls' going to (elementary) school. Thirdly, such discourse by cotton-picking laborers that girls' going to school is “ayıp” (without wearing scarves) not only creates barriers against girls' education but also reproduces women's cultural inferiority. At the same time, their lower educational background is the reason why many women are hired out as insecure and low-waged laborers in agriculture. In addition, there is a gap between the national policy of secular education that requires that women be secular by not wearing scarves and a social norm that women have to wear scarves after 8 or 9 years of age in rural areas in southeastern Anatolia in Turkey.

From analyses of these issues, I point out that a vicious circle that determines women's inferior place has arisen from gender hierarchy in rural society in southeastern Anatolia in Turkey, of which cultural values infiltrate through the discourses of “ayıp.”

はじめに

本稿の目的は、トルコ農業において女性

を底辺の職種に就かせるような悪循環の仕組みを検証することである。農業におけるジェンダー分業¹⁾は、農業の構造的な変革

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程満期退学
金城学院大学非常勤講師

によるものだけではなく、社会や文化に見られる女性の置かれた劣位な立場と直接、間接的に関連している。換言すれば、女性が底辺の職種に就く背景には、社会のなかで女性を劣位な立場に追いやるような悪循環の仕組みがあるとと言える。この悪循環の仕組みとは、農業生産において女性が生産的な労働をしても、それが社会的あるいは家族内の地位に反映されないことに外ならない。

本稿では、上述の悪循環の仕組みのなかで、次の三点に焦点をあてて論ずる。第一に、農業構造の変化により農業におけるジェンダー役割に変化が見られたこと、第二に、農業構造の底辺に位置する女性の非識字率が極めて高いこと、そして第三に、上述の一と二の文化的背景を人びとの語りから読み解くことである。その際、農業構造の底辺に位置する人びととして綿摘み季節労働者を取り上げ、彼らを対象にして筆者が行った聞き取り²⁾のなかで人びとが語った内容から「アユップ」(「恥」)の行為について分析する。

ジェンダー分業に関する従来の研究では、女性の劣位性(伝統的なジェンダー観)とジェンダー分業においてどちらがその一方の成立要件となっているかを検証するものが多い。例えば、ギタ・セン(1982)は、インドの二つの地域の農業と農村を取り巻くさまざまな変化のなかで、ジェンダー分業は、伝統的な女性の役割よりも、むしろ、経済的圧力によって決定づけられてきたと述べている³⁾。他方、トルコ農村におけるジェンダー役割に関しては、ベフルーズ・モルヴァリディの論文のなかで、「女性の仕事」を男性がすることは、地域社会に受け入れ

られない点が指摘された。そのなかで、同氏は、農業の生産性よりもむしろ既存のジェンダー役割を農民に重視させる社会的圧力の存在について述べている(Morvaridi 1993: 93)。しかしながら、この同氏の論文には、女性の劣位性という視点が抜け落ちている。

トルコの綿摘み季節移動労働に女性が多く雇用される理由として伝統的なジェンダー観か経済的な困窮かを問うことでは、綿摘み女性労働者が現実的に直面する問題点が明らかにはならない。むしろ、両者の接点を見出すことによって、綿摘み労働で働く女性に直結する諸問題を解明する手がかりとなるものと筆者は考える。筆者が「アユップ」の行為に着目するのはそのためである。トルコの農村社会における「アユップ」の行為は、「人倫の道に反する行為」(松原: 39)として、人びとの行動の指針となっている。とくに、ジェンダー役割を逸脱した行為は、「アユップ」として捉えられることが多い。つまり、トルコの農村社会において人びとの行動の拠り所となる伝統的なジェンダー観が、アユップの行為によって社会制度のなかに位置づけられる。それと同時に、経済的圧力により女性が賃金労働者化してもなお、女性の文化的な劣位性は維持されるのである。したがって、次に、トルコ社会における女性の劣位な立場を明らかにした上で、ジェンダー分業や伝統的なジェンダー観に関する人びとの語りを分析し、さらに、トルコ農村におけるジェンダー規範の文化的な位置づけについて考察したい。

1 就業構造と非識字率に見られる男女間格差

1. 農業生産における女性

トルコにおいて、1950年代以降、農業の近代化と商業化の過程で、「近代的な」農業の担い手である男性主体の農業経営がされ始めると、農業生産において女性が果たす役割は、「近代化されない」部分に分別化された。ここで「近代的な」農業とは、トラクターを中心とする農業機械と改良品種、化学肥料、殺虫剤などを使用した農業を指すものとする。また、1950年代に始まるトルコ農業の近代化は、農業の生産性を高め、自給自足的な農業から市場向けの作物栽培へと1960年代以降農業が大きく転換する契機となった（Keyder, 1988）。一方、一部の換金作物や工芸作物においては、収穫や雑草取りなどの機械化されなかった作業には、農業労働者の雇用が見られるようになった（Hinderink and Kiray）。

トルコ南部のアダナ県における綿花栽培では、非近代的な部分で多くの女性労働者が雇用されている。そして、そのほとんどは、他県からの出稼ぎである。出稼ぎ労働者の出身地は、南東部アナトリア地方と呼ばれる、トルコ国内で比較的経済発展の遅れた地域である⁴⁾。その南東部アナトリア地方からの労働者、しかもその半数以上が女性労働者によって充当される、綿花栽培における非近代的な職種とは、鋤入れ（çapa）と綿摘み（toplama）である。アダナ県の綿花栽培での鋤入れ（4、5月）と綿摘み（8月下旬から11月まで）は、どちらも手作業で行う労働集約的な作業である。

現在、トルコでは、農業部門で働く者の

数は、男性よりも女性のほうが多い。1990年の人口センサスでは、トルコ全国の農業就業者数のうち、55%が女性である（表1参照）。表1は、トルコの農業就業人口を男女別に表したものである。この表から、1980年以降、トルコにおける農業部門の就業人口では、女性の数が男性の数をやや上回ってきたことがわかる。トルコ農業において女性が従事する割合が高くなってきた理由として、男性の都市への出稼ぎの増加、栽培作物の変化、労働集約的な農作業の増大などが指摘できる⁵⁾。

表2は、トルコの男女別就業人口における農業、工業、サービス業の各産業の就業者数の割合である⁶⁾。表2の男女別就業人口のうち農業に従事する者の割合を見ると、1990年の統計では、女性は82.1%、男性は37.6%である。つまり、トルコ全体で働く女性の約8割が農業部門に集中しているのである。一方、農業部門で働く男性は、男性就業者数の約4割にとどまっている。とくに、男性就業者数のうち農業以外の産業で働く者の割合は、1950年以降増え続けている。また、農業以外の職業で働く女性就業者の割合もまた、1970年以降漸増傾向にある。しかし、1990年の人口センサスのデータから算出すると、農業以外の産業で就業する女性の割合（17.9%）は、男性の同じ割合（62.4%）と比べて非常に低い値となっている。これらの数値から、トルコでは、農業部門以外の職業で女性が就業する機会が限られていることがわかる。さらに、トルコで働く女性が農業部門に集中している理由として、女性の社会進出が社会・文化的な要因によって妨げられていると考えることができる。

トルコ農村社会における女性の劣位性とジェンダー分業

表1 トルコにおける男女別農業就業者数と男女比(%)

年	農業就業者数			女性と男性の割合		
	合計	女性	男性	女性	男性	小計
1970	10230496	5199918	5030578	50.8%	49.2%	100.0%
1975	11694513	5484490	6210023	46.9%	53.1%	100.0%
1980	11104501	5948959	5155542	53.6%	46.4%	100.0%
1985	12118533	6484257	5634276	53.5%	46.5%	100.0%
1990	12547796	6900466	5647330	55.0%	45.0%	100.0%

(出所) 表8 “Ratio of population by last week’s economic activity and sex,” 1990 Census of Population, pp.16-17.

表2 トルコの男女別就業人口における農業、工業、サービス業に就業する人口の割合(1927 - 1990)

年	女性 (%)					男性 (%)				
	農業	工業	サ業	他	小計	農業	工業	サ業	他	小計
1927	33.8	0.6	0.7	64.9	100	64.2	6.4	11.8	17.7	100.1
1935	54.1	1.9	1.5	42.4	99.9	64	9.7	17.7	8.6	100
1940	56.3	1.6	1.2	40.9	100	68.4	8	18.8	4.7	99.9
1950	69.5	1.4	1.4	27.7	100	69.3	9.3	15.4	6	100
1960	61	1.7	1.5	35.8	100	60.6	11.1	20.2	8.1	100
1970	89.5	5.2	4.4	0.9	100	54.1	16.6	26.7	2.7	100.1
1980	87.3	4.6	7.5	0.6	100	44	22.2	32.7	1.2	100.1
1990	82.1	6.9	10.8	0.2	100	37.7	24	37.4	0.8	99.9

(注) 1927、1935、1940、1950、1960年の統計では、15歳以上の人口を含む。

1970、1980、1990年の統計では、12歳以上の人口を含む。

1980、1990年の数値には、求職中の失業者の数は含まれていない。

(出所) 次の各資料より筆者が作成した。

表37 “Sayım Yılları ve Esas Meslek İtibariyle 15 ve Daha Yukarı Yaşlardaki Nüfus” (「統計年度と主たる職業別15歳以上の人口」) 1959 İstatistik Yıllığı (『トルコ統計年鑑1959』) p.87.

表67 “15 ve daha yukarı yaşlardaki nüfusun esas meslek grupları itibariyle ayrılışı” (「15歳以上の人口における主たる職業別人口」) Türkiye İstatistik Yıllığı 1964/65 (『トルコ統計年鑑1964/65』) p.80.

表8 “Ratio of population by last week’s economic activity and sex”, 1990 Census of Population, pp.16-17.

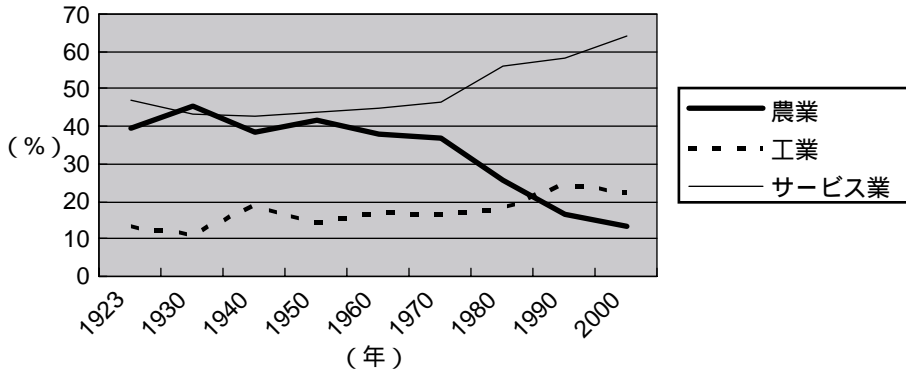
次に、産業別に農業を見ると、工業、サービス業と比べて徐々に農業部門の重要性がトルコ国内で失われてきたことがわかる。図1は、トルコの国民総生産(GNP)に占める農業、工業、サービス業の割合を示したものである。これを見ると、GNPに占める農業部門の割合は、1930年の45.5%を最大にして、減少傾向にある。とくに、その割合は、1970年以降2000年まで顕著に減少してきている。それに対し、GNPに占める工業部門やサービス業部門の割合は、1970年代以降その比重が大きくなってきている。つまり、1950、60年代以降、トルコの産業構造が農業から工業やサービス業主体の産業構造へと変化してきたことが、図1により明らかである。

一方、トルコの女性が農業以外の産業で働く割合は、男性の同じ割合と比べて極めて低い。したがって、トルコにおいては、1950年代以降の産業構造の変化が、女性と比べて男性のほうにより顕著に表れていることが指摘できる。さらに、トルコの近代化の特徴として、女性の就業形態が産業構造の変化に伴っていないことが挙げられる。言い換えれば、トルコの女性は、国の工業化、近代化による産業構造の変化から取り残されてきたと言える。

2. 非識字率に見られる南東部アナトリア地方の女性

筆者が聞き取り調査をした南東部アナトリア地方出身の綿摘み労働者家族53家族⁷⁾

図1 GNPに占める農業、工業、サービス業の割合



(出所) 表21.6 “Sectoral shares in Gross National Product (%)” *Statistical Indicators 1923-1995*, p.430.
 表403 “Gross national product, growth rate and sectoral shares,” *Statistical Yearbook of Turkey 2001*, p.643.

のなかで、読み書きができると回答した女性は1名だけであった。つまり、筆者が面接した綿摘み労働に従事していた女性の大半が非識字であり、トルコで義務教育とされる小学校を終えてはいなかった⁹⁾。

このことは、近代的な教育制度のなかに、トルコの南東部アナトリア地方の農村女性たちは取り込まれてこなかったことを示唆している。

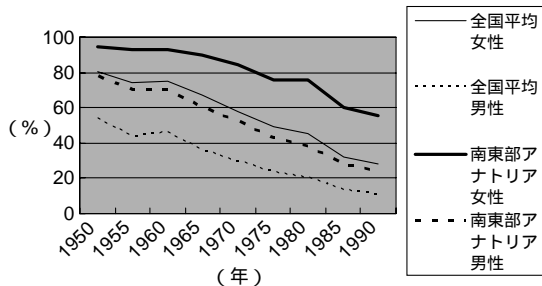
下の表3は、トルコ国民全体と南東部アナトリア地方において、1950年から1990年ま

での非識字率の推移を男女別に表したものである。1990年には、南東部アナトリア地方の女性の非識字率は、55.2%と、半数以上の女性が非識字であることがわかる。それに対して、南東部アナトリア地方の男性の非識字率は24.4% (1990年) と、同地方の女性の非識字率を大きく下回っている。また、トルコ人女性全体の平均で見ると、1990年の非識字率は28.0%であり、この数値もまた南東部アナトリア地方の女性の非識字率とはかなりの格差が存在する。

表3 トルコにおける男女別非識字率の推移
 (1950 - 1990年)
 全国平均と南東部アナトリア地方との比較(%)

年	全国平均		南東部アナトリア	
	女性	男性	女性	男性
1950	80.2	54.3	94.2	77.8
1955	74.0	43.7	93.1	70.5
1960	75.1	46.3	93.0	70.1
1965	67.1	35.9	89.5	60.3
1970	58.2	29.7	84.2	52.4
1975	49.5	23.7	76.1	43.2
1980	45.3	20.0	75.7	38.6
1985	31.8	13.5	60.3	28.0
1990	28.0	11.2	55.2	24.4

図2 トルコにおける非識字率の推移



(注) 南東部アナトリア地方の行政県は、アディヤマン、ディヤルバクル、ガジアンテップ、マルディン、シャンルウルファ、シイルト、バットマン、シュルナクの8県を指す⁹⁾。

(出所) SEAP Provincial Statistics 1950-1994, p.10より作成。

トルコ人全体と南東部アナトリア地方を比較した、男女別の非識字率を1950年から1990年までの推移で見ると、南東部アナトリア地方の女性が、この40年間に教育の場から取り残されてきたことがわかる(図2参照)。すなわち、南東部アナトリア地方の女性と男性の非識字率における格差は、1950年から1990年までに16.4ポイントから30.8ポイントに広がっている。さらに、同時期の非識字率の格差をトルコ人女性全体と南東部アナトリア地方の女性との比較で見ると、14ポイントから27.2ポイントへとその格差は増大したことがわかる。一方、男性間の格差、つまり、トルコ人男性全体と南東部アナトリア地方の男性との非識字率の格差は、1950年の23.5ポイントから1990年の13.2ポイントに減少している。さらに、1950年から1990年までの南東部アナトリア地方とトルコ国内全体における非識字率を比較すると、男性間の格差は縮小しているにもかかわらず、女性間の格差は増大している。このことから、南東部アナトリア地方の女性には、教育を受けるのに障害となるような壁が存在することが考えられる。

II 「アユップ」とジェンダー役割

1. ジェンダー分業と「アユップ」

トルコ南部のアダナ県は、トルコにおける主要な綿花栽培地のひとつである¹⁰⁾。綿花は、トルコの繊維産業を下支えする重要な工芸作物である。その綿花を収穫するために、毎年約12万人の移動季節労働者がアダナ県で雇われている。その移動季節労働者のほとんどがトルコの南東部アナトリア地方から一時的に「移動」してきた人びとである。そして、南東部アナトリア地方から

アダナ県へ移動して、綿摘みや鋤入れの作業に携わる季節労働者の半数以上が女性である。

筆者が現地で聞き取りをした際、アダナ県の綿花栽培地では、綿摘みの仕事は「女性の仕事」と考えられていた。アダナ県外から移動して来た綿摘み労働者の男性のなかにも、「本来は女性の仕事であることを男性である自分がするのはアユップ(恥)だ」と考えている人びとがいた。アダナ県の綿花栽培において、鋤入れ¹¹⁾もまた、「女性の仕事」である。筆者がアダナ県内の5農村で聞き取り調査したところ、綿摘みは7割方、鋤入れは8割方女性が行うと各農村の農民グループは述べていた¹²⁾。

H.A.氏は、1997年に筆者が聞き取りをした際、アダナ市近郊の農村において約100ヘクタールの土地で綿花栽培をしていた。同氏は、自身の綿花畑で働く綿摘み労働者に関して次のように述べた。

「綿花栽培では、ほとんどの作業が機械化されているが、鋤入れと綿摘みは、手作業で行われます。鋤入れは、予定どおりに行えば綿摘みほど時間に追われることはないが、しかし、綿摘みでは、綿ボールから綿の実がはじけるとすぐに綿を摘まなければ、綿の品質が落ちて買い取り価格にも影響します。それだから、綿摘みの時期に安定した労働力を確保することが一番の問題となります。私の農場では、二つのグループが綿摘みをしています。それぞれ約50人のグループですが、一つは女性だけのグループです。彼女たちは、南東部アナトリア地方からアダナ県へ長年に亘って毎年移動季節労働を繰り返すうちに、アダナ市郊外へ移住した人びとです。彼女たちは、トラック

の荷台に乗って毎日アダナ市郊外の自宅と綿花畑を往復します。もう一つのグループは、アディヤマン県からの労働者で、家族で同郷から来た人びとです。彼らは、鍬入れから綿摘みの時期まで、綿花畑脇のテントで生活します。私としては、女性だけのグループのほうを優先しているのですが、それだけでは人手が足りないので、アディヤマン県からの労働者も雇用しています。私の労働者を探してくれるのは、手配師の男性です。この手配師の男性は、私の農場で綿摘みをする二つのグループを手配してきます。手配師と直接の交渉をするのは、私の農場のマネージャーですが、私は、なるべく女性の数を多くするようにと手配師の男性に伝えてあります。なぜなら、男性よりも女性のほうが、手早くきれいに綿を摘むからです。つまり、仕事の効率から女性のほうを優先しているのです。」

さらに、筆者が「男性が綿摘みをするのはアユップである」という表現についてどう考えるのかを問うと、同氏は、次のように答えた。

「(男性が綿摘みをするのは)アユップだということはよく言われます。しかし、南東部アナトリア地方では、男性も仕事に就くことができない。それだから、生活のために綿摘みに来ているんですよ。」

農場所有者のH.A.氏は、綿花以外にも小麦や柑橘類の栽培など、多角的な農業を営んでいる。総面積約350ヘクタールの農地を所有する同氏の農場では、農場全体の作物を管理するマネージャーの男性1名のほか、年季契約の男性労働者10数名が雇用されていた。彼らは、主として、トラクターによる耕云、播種、作物の運搬、灌漑用水の管

理、トラクターの整備などの仕事をするとのことであった。

H.A.氏の綿花栽培のために労働者を手配したのは、手配師 (elçi, elci) のM.S.氏であった。1996年に筆者が聞き取りした際、M.S.氏の口から次のような発言が出た。

「男性が綿を摘むのは、アユップなんだ。それだから、(自分は)女性だけのグループを作っているんだ。男性は、仕事がなくとも綿摘みには来ないよ。綿摘みは男性の仕事ではないからね。それに、男性がグループに加わると、統率が取れなくなるから、まとめ役としては女性だけのグループのほうがいい。なぜなら、女性は、(自分の)言うことを素直に聞くから、まとめるのには都合がいいのさ。」

そして、筆者がM.S.氏に対して「男性が綿摘みをするのをアユップと言うけれども、女性が外で働くほうが(トルコ農村の社会規範に照らせば)アユップではないのか。」と尋ねたとき、同氏は、次のように答えた。

「綿花栽培主 (agalar) は、男性よりも女性の労働者を求めている。そのため、(自分は)女性だけの労働者グループを作っている。彼女たちは、綿花畑まで毎日通うことのできる場所に住んでいるので、家族の男性はついてこない。綿摘み労働に来る女性は、自分の住んでいる地区の女性たちといっしょにトラックの荷台に乗って綿花畑まで連れてこられる。それだから、その間女性たちに何か悪いことが起こる心配はないので、家族の男性は町にいられるのさ。」

M.S.氏が手配した女性だけのグループで綿摘みをする女性たちは、アダナ市郊外に居住して毎日綿花畑へ通いで来ている労働者である。このように、集団で「通い」の形

態をとることによって、家族の男性が伴わなくても女性だけで綿摘みへ来ることが可能となる。ここで述べられている「悪いこと」とは、女性が犯す恐れのあるアユップの行為を指す。そして、ここで言われる「アユップの行為」は、具体的には、女性が見知らぬ男性の目に触れたり、見知らぬ男性と話したりするほか、都市の「悪い」女性の影響を受けたりすることとして、M.S氏は筆者に説明した。つまり、農村のジェンダー規範に照らして性的に淫らな行為や性的に放逸であると周囲の人びとに認知されるような行為が、「悪いこと」であり、女性が犯す恐れのある「アユップの行為」として表現されるのである。

さらに、女性だけのグループを構成している人びともまた、移動季節労働者と同じように南東部アナトリア地方の出身である。しかし、家族いっしょに綿摘みに来ている移動季節労働者は、同郷者と一つのグループを形成するのがふつうである。それに対し、女性だけのグループでは、トルコ系、アラブ系、クルド系といった異なる母語集団の人びとが同じグループを構成している。このことは、民族的な背景よりもむしろ、「女性」という属性の方が綿摘み労働者グループを形成する上で決定的な要因となることの証左である。したがって、綿摘み労働に見られるジェンダー分業は、それぞれの母語集団を超えて、トルコの農村の人びとが持つジェンダー意識を反映していると言える。

2. スカーフの習慣と「アユップ」

筆者によるインタビューのなかで、「アユップ」という言い回しは、ジェンダー分業

を侵す行為だけではなく、南東部アナトリア地方の一部の農村の人びとの女子教育観についての語りにおいても用いられた。すなわち、トルコ南部のアダナ県と南東部のシャンルウルファ県で筆者が聞き取りをした際、「女の子が小学校へいくのはアユップだ」という人びとが多くいた。次に挙げる二人の事例では、父親と母親がそれぞれ自分の娘の教育について述べている。

綿摘み労働者のM.Ş氏は、筆者がアダナ県のY村で聞き取りをした1997年当時43歳であり、妻(37歳)との間に、7人の子供がいる。綿摘みには、9人家族全員で当初来ていたが、19歳の長男と17歳の次男は、それぞれ大学と高校へ通うために故郷のシャンルウルファ県へ戻っていた。同氏には、15歳と13歳の娘がいるが、いずれも、学校へは全く行っていなかった。他方、12歳と9歳の息子は、小学校へ通っているとのことであった。M.Ş氏は、女の子の学校教育について次にように述べた。

「村の中では、(女の子は)学校へは行かせないんです。町(şehir)にいれば、(女の子も)学校へ行かせるけれど。これは、習慣なんですよ。村で、女の子が(学校へ)行くと、アユップなんですよ。男の子と女の子がいっしょの場所にいることが、アユップだと思われるんです。しかも、女の子は(学校では)スカーフを着けていないんだから¹³⁾。」

この、M.Ş氏の話しでは、町では許される女子教育が、村では、アユップと言われるとされた。つまり、女子教育に関する町での規範と農村での規範が異なっていることがわかる。このことから明らかなのは、女の子が教育を受けられないような社会的な

圧力が農村には存在することである。次の事例では、女子教育を阻む社会的、文化的な規範がより具体的な言葉で語られた。

筆者がシャンルウルフファ県のG村で1997年11月に聞き取りをした、綿摘み労働者のZ.B.氏は、当時35歳、女性で、夫と息子1人、娘5人と一っしょに、1997年の8月下旬から10月下旬に、故郷のG村を離れてアダナ県のY村に綿摘みのために滞在していた。彼女には、19歳の娘を筆頭に、娘7人と息子1人がおり、上2人の娘は既に結婚して家を出ていた。Z.B.氏の15歳の息子は小学校を卒業していた。しかし、19、18、15、13歳の娘たちはいずれも、小学校には、1、2年、あるいは、3、4年行ってはいるが、途中でやめてしまっていた。筆者がZ.B.氏の娘たちの教育について質問した際、彼女は次のように述べた。

「娘は、成長すると、学校に行くのを恥ずかしいがるのよ。だいたい、7、8歳や10歳くらいになるとね。頭に何も着けずに(スカーフをせずに)(学校に)行かなければならないからね。(スカーフをせずに学校へ行くことは)私たちの習慣では適当ではないのよ。つまり、イスラームでは悪行(günah)なのよ。イスラームは、社会的にはあまりよく思われず、むしろ(世俗主義国家トルコの)社会通念とは逆になっている。だけど、(イスラームの)悪行をする者(günahkâr)になってはいけないのよ。娘たちにとっては、ナムス(道徳的な、名誉のある)でいることが大切な。そうでないと、ナムスズ(恥知らず、不道徳な)になってしまうからね。」

III 農村のジェンダー規範とアユップ

1. 「アユップ」の意味

アユップという言葉は、アラビア語起源の名詞で、トルコ語辞典によれば、その意味は、「1. 社会の道徳的な規範に反した、恥ずべき状態、または行為、2. 悪いところ、欠点、3. (形容詞) 恥ずべき感情をもたらす」である¹⁴⁾。したがって、「男性が綿摘みをするのはアユップである」という言説は、言い換えると、男性が綿摘みをすることは、社会的、道徳的規範に反する行為であるということになる。

綿摘みと同様に、男性が野菜を収穫することもまた、トルコの農村ではアユップの行為として位置づけられる。筆者が1995年に訪れた、トルコの中央アナトリア地方のK県Ç村では、女性が中心となって野菜の露地栽培が行われていた。Ç村の主産物である小麦の生産では、ほとんどの作業が機械化されていた。そのため、農家の女性たちは、機械化により小麦生産に携わる時間が減った分、1992、1993年頃から借地をして野菜栽培を始めたということであった¹⁵⁾。

Ç村では野菜栽培は、従来家の庭(bahçe)で女性が自家消費用に行っていたので、「女性の仕事」とみなされている。ここでの野菜栽培は、トラクターを用いずに鋤を使って土を起し、種を撒き、収穫する、手作業の仕事が女性が担当する。一方、男性は、灌漑用水を自身の畑に引き入れる作業を役所の配分に従って行う。とくに、野菜の取り入れの作業には、男性は決して携わらない。なぜなら、野菜を取り入れる作業は、「女性の仕事」であり、男性が野菜を取り入れる作業をするのは、「アユップ」であるか

らだと、Ç村で妻が栽培する野菜畑で灌漑用水を引き入れる作業をしていた男性は筆者に語った。

トルコの農村では、家は、女性の(いるべき)場所である。そして、家の庭(bahçe)もまた、家の延長として考えられるので、家の庭での仕事は女性の仕事としてみなされる。一方、灌漑用水の管理や市場での販売、現金の管理など、外部とのアクセスや技術が必要となる仕事は、男性の仕事である。

このように、女性と男性の「するべき」仕事の違いは、「いるべき」場所の違いに起因することがある。さらに、Ç村で女性が中心となって栽培していた野菜は、自家消費用ではなく、市場向けであった。それにもかかわらず、野菜栽培は、庭(bahçe)の仕事であるので、「女性の仕事」であり、男性が野菜を収穫するのはアユップの行為に相当するとÇ村の人びとは考えていた。

他方、「男性が綿摘みをするのはアユップである」という言説に反して、多くの男性労働者が綿摘みに携わっていることも事実である。つまり、トルコにおける綿花栽培では、農業開発の遅れた地域(南東部アナトリア地方)から進んだ地域(アダナ県)への労働力の移動が農繁期に見られる。そして、この労働力移動は、この二つの地域の経済格差から生じている(Şeker: 99-107, Yalçın: 29-36)。すなわち、綿花栽培における綿摘み労働は、ジェンダーと階級の両方の序列において、劣位にある仕事であると言える。言い換えれば、ジェンダーと階級秩序において劣位にある仕事を男性がすることは、アユップと考えられる。一方、現地の人びとは、同じ仕事を女性がすること

をアユップとは考えないのである。したがって、「男性が綿摘みをするのはアユップである」という語りは、階級秩序よりもジェンダー秩序が重視されていることの表れであると言える。

2. 近代的価値観とアユップ

トルコ共和国が1923年に建国されて以来、トルコでは世俗主義が国家理念の一つである。トルコの世俗主義政策では初等教育における女子のスカーフ着用は、現在に至るまで事実上認められていない。そのため、前述のZ.B.氏は、自分の娘がスカーフ着用が小学校への通学かという選択を迫られたときに、スカーフを着けずに学校へ娘を通わせることを彼女は断念している。なぜなら、将来社会に出て働くことが期待される男の子とは違い、女の子は10代後半で結婚した後は家庭内で生活することがトルコの農村社会では求められているからである。一方、農村社会においてgünahkâr(イスラームの悪行をする者)やナムススズ(恥知らず、不道徳な)というレッテルが一旦貼られてしまうと、その女性の性的な放逸さやだらしなさばかりが強調され、女性とその家族は周囲の好奇の眼にさらされてしまうのである。そのため、男の子と女の子がいっしょの場所にいるところでは、女の子はスカーフを着けねばならず、その規範に反すると「アユップ」(前述のM.Ş.氏の語り)とトルコの南東部アナトリア地方の農村では考えられる。このように、トルコの近代以後の国家理念に基づいた考え方に反することよりも、ナムススズと周囲の人間にみなされるおそれの方が人びとの行動を強く規制する圧力となっていることが、同氏の語り

のなかから理解できる。

ナムスズとは、「ナムス」、つまり、「名誉」や「貞節」という名詞に、「スズ」（「～のない」）という接尾辞のついた言葉である。実際、ナムスズという言葉は、「恥知らずな」や「鉄面皮の」という意味で、社会的、文化的規範に反した行為をした相手に対して用いられる。そして、ナムスズは、相手の「人格をも否定する言葉」として発せられることが多い（松原1986：38-39）。とくに、女性に対してナムスズと言われた場合、「貞節のない」女性として、周囲の非難を受けることを意味する。さらに、この、女性のナムス（貞節）を巡っては、しばしばナムス殺人（namus cinayeti）と言われる殺人事件に発展するほど、トルコの人びとが生きる上で守る必要のあるものである。

つまり、スカーフを着けずに学校へ通う（アユップな行為をする）女性は、ナムスズという言葉によって、その女性の貞節や人格までも否定されてしまうのである。それゆえ、女の子は、学校へ行かないことを選択するのである。このように、アユップの行為は、トルコの社会制度やジェンダー秩序と深く関わっている。

同様のことが、農村のジェンダー分業についても言える。ベフルーズ・モルヴァリディは、トルコの東部地方の農村で、「女性の仕事」とみなされている鍬入れの仕事を男性はすることができないような社会的な圧力が存在することを現地の農民の語りのなかで書いている。その農民の語りを要約すると、その農民は、妻が病気になり、しかも女性賃金労働者を雇うだけの経済的な余裕がなかったので、ピート畑で妻の代わりに一日鍬入れの作業をした。しかし、そ

の後、4日間病に伏したばかりか、やっと歩けるようになって村のコーヒーハウスへ行くと、周囲の男性から侮辱的な言葉を浴びせられた。約1ヶ月の間、その農民のした行為は、農村で噂の種となったというものであった（Morvaridi 1993: 93）。

このように、トルコの農村では、「女性の仕事」を男性がすることが、周囲の人間から非難される要因となる。このような考え方は、農業の生産性に反しても固持されることが多い。言い換えれば、社会規範に反する行為を犯した者に対して、トルコの農村では、人格を否定するような周囲からの制裁が加えられる。それゆえ、トルコの農村の人びとは、近代社会において合理的かどうかよりもむしろ、周囲の人間に受け入れられるかどうかによって行動を制限していると言える。そして、社会規範に反する行為は、「アユップ」と指摘される。とくに、女性の役割、男性の役割を侵すような「アユップ」とされる行為については、近代的な価値観よりもジェンダー役割に関する社会的、文化的な規範の方が重視される傾向にある。

IV 結論

以上述べたように、トルコの農業において女性を底辺の職種に就かせるような悪循環の仕組みは、女性と男性の社会的、文化的優劣によって、男性が主として働く仕事と女性が主として働く仕事が序列化されていることに起因している。つまり、男性が「女性の仕事」をするのはアユップであると捉えられているように、男性の仕事と女性の仕事に優劣が設けられていることは明らかである。言い換えれば、農村女性が劣位

な存在であるがゆえに、「女性の仕事」を男性がするのはアユップと農村の人びとは考えているのである。

しかし、農村に資本主義が浸透し、農村の人びとの間で階級格差が生じると、社会・経済的に劣位な立場に置かれた男性もまた、「女性の」職種で働くようになった。このことは、人びとが伝統的なジェンダー規範を侵して経済的理由を優先していることの表れである。同時に、「男が綿摘みをするのはアユップである」と多くの農村の人びとが語った背景には、従来「女性の仕事」であった職種に男性が従事することに対する警戒の念がある。さらに、雇用者側は、仕事の効率性から女性労働力を綿摘み労働に求めている。これらの事例から、綿摘み労働に見られるジェンダー関係は、女性の劣位性ではなく、経済的理由により決まるのではないかと考えることも可能である。しかしながら、実際には、「女性は自分の言うことを素直に聞き、統率を取りやすい」という手配師の男性の語りから、既存のジェンダー関係に基づいて女性労働者を優先していることがわかる。つまり、男性が主で女性が従というトルコ農村におけるジェンダー秩序にしたがって、綿摘み労働者の労務管理がなされていることが、この手配師の男性の言葉から明らかである。

また、トルコ農業の最底辺の職種と言える綿摘み季節労働では、従来移動しない多くの女性たちが出稼ぎのために他県へと移動している。このことは、伝統的なジェンダー観よりも経済的困窮の方が人びとの行動の拠り所となっていることを示唆している。しかし、家族といっしょに移動する形態をとることで女性の移動は既存のジェン

ダー規範に抵触しない。さらに、家族いっしょでの移動と労働という形態をとることによって家族の年長男性が女性をコントロールする家父長的なジェンダー関係は保持される。

さらに、男性が「女性の仕事」をすることがアユップとみなされることによって、ジェンダー分業が序列化されるばかりではなく、女性の文化的劣位性が強調される。同様に、「女の子が学校へ行くのはアユップである」という言説は、女子教育の障壁となるだけではなく、女性の文化的劣位性を再生産していると言える。同時に、「女の子が学校へ通うのはアユップ」とみなす南東部アナトリア地方の農村の人びとの考え方は、南東部アナトリア地方における女性の非識字率の高さに顕著に表れている。

他方、教育程度が低いことは、不安定で賃金の低い職種に南東部アナトリア地方の女性が多く雇われる理由である。トルコの農村社会では、女性が教育を受けたとしても、教育という投資に見合うだけの収入を得られる保障は何もない。したがって、安い賃金で働く女性は、教育の機会が与えられないことが多い。つまり、女性の文化的劣位性によるジェンダー的差異は、女性が条件のより良い仕事を選択することを困難にしている。

加えて、農村女性の教育よりもスカーフ着用を重視する南東部アナトリア地方の一部の人びとの考え方は、世俗主義を国是の一つとして掲げるトルコ共和国の理念とは異なることが指摘できる¹⁶⁾。とくに、農村女性に対しては、農村社会の伝統的な規範が人びとの行動を律していることが、綿摘み労働者によって語られた女子教育観に表れ

ている。例えば、女子の通学は、町（都市）に居住しているのであれば認められるが、農村では許されないというように、農村社会におけるジェンダー規範の強さが綿摘み労働者の語りにおいて見られる。このように、個人の考えよりも、農村社会の規範のほうに重視されるような社会において、トルコの農村女性は、近代的な理念から排除されてきたと言える。

とくに、南東部アナトリア地方では、女性のスカーフ着用という社会規範と世俗的な（スカーフをしない）女性を育成しようとする国家政策の間に隔たりがあることが、筆者の聞き取りから明らかになった。すなわち、アユップの行為について、世俗主義的な教育よりもむしろ、イスラーム的慣行の方が重視されるべきものとして南東部アナトリア地方の農村出身の人びとによって語られたことは特筆に値する。言い換えれば、トルコの南東部アナトリア地方では、伝統的な社会規範が国家政策に反して存続してきたと言える。このことは、オスマン朝の崩壊後、1923年にトルコ共和国が建国された時にムスタファ・ケマル・アタチュルクが導入した世俗主義の考え方が南東部アナトリア地方の農村には浸透しなかったことの証左である。

さらに、女性がスカーフで頭を覆うという社会規範は、南東部アナトリア地方の農村におけるジェンダー秩序と深く関わっている。つまり、トルコの農村社会では、女性の行動や言動は家族の年長の男性のコントロール下にあるべきと考えられている。そして、家父長制的な家族関係を維持することは、男性が主で女性が従である農村社会のジェンダー秩序を維持することでもあ

る。また、農村女性のスカーフ着用は、女性の貞節や人格とともに家族の名誉に関わる重要な問題である。このように、農村女性が頭に着けるスカーフは、イスラーム的慣行としてだけではなく、トルコ農村社会における家父長的ジェンダー秩序のなかに位置づけられる。このことから、社会規範に反したアユップの行為を女性がすることは、家父長的なコントロールや農村社会のジェンダー秩序に対する脅威となることがわかる。同様に、女性を劣位に置く悪循環の仕組みは、序列化されたジェンダー分業や非識字率の高さとともに、トルコの南東部アナトリア地方の農村社会のジェンダー秩序に根ざすものと考えられる。

ここでは、トルコの綿摘み季節労働者が社会的に劣位な立場に置かれていることとその文化的な背景が検証された。筆者が聞き取りをした綿摘み季節労働者の故郷である南東部アナトリア地方では、現在、トルコの国家プロジェクトである南東部アナトリア開発計画（GAP）により農業開発が推し進められつつある¹⁷⁾。その開発計画において、女性に対する識字教育や職業訓練がトルコ政府のGAP地域開発局によって同地域の23ヶ所（2002年7月現在）で実施されている¹⁸⁾。このような女性を対象とした教育支援や職業訓練は、今後、南東部アナトリア地方の社会が変化する過程で同地方の女性がどのような役割を担っていくかを大きく左右するものと考えられる。したがって、このような南東部アナトリア地方の女性を対象とした識字教育や職業訓練の取り組みとその際女性が直面する文化的な障壁を検証することによって、農村女性のエンパワーメントについて研究することが筆者の次

トルコ農村社会における女性の劣位性とジェンダー分業

の課題である。

注

- 1) 本稿で“ジェンダー”という言葉を用いる理由は、生物的な性差ではなく、社会的、文化的な女性と男性の役割に基づいて、女性と男性の仕事が割り振られていることを顕示させるためである。
- 2) 本稿で論ずる内容に関して筆者は、1996、1997年の綿摘みの時期（8月下旬から11月頃）にトルコのアダナ県とシャルウルファ県で現地調査した。その調査に際し、FASID（国際開発機高等教育機構）平成8年度フィールドリサーチ助成金、トヨタ財団1997年度研究助成を受けた。
- 3) Gita Sen, “Women Workers and the Green Revolution,” in *Women and Development: The Sexual Division of Labor in Rural Societies*, pp.29-64.
- 4) 1991年から1996年までに移動季節労働者としてアダナ県へ来た労働者の出身県は、トルコの南東部アナトリア地方のシャルウルファ県、アディヤマン県、マルディン県、ディヤルバクル県、ガジアンテップ県、中東部地方のマラティア県、南部地方のハタイ県である。アダナ市にある職業・労働者紹介所（İş ve İşçi Bulma Kurumu）で筆者が閲覧した内部資料では、1996年にアダナ県へ来た移動季節労働者数の40.3%がシャルウルファ県、28.0%がアディヤマン県の出身である。両県を含めた南東部アナトリア地方からの移動季節労働者は、全体の90.0%を占める。
- 5) *Turkey: Women in Development*, p.167.
- 6) 1927年から1960年までの数値において、工業部門には、鉱山に関する職業と製造業、工場・修理労働者を含む。同じ数値において、サービス業には、技術者・自由業に関わる職業、会計・経営者・事務所に関わる職業、販売に関わる職業、交通・通信に関わる職業、サービスに関わる職業、非熟練労働者（農業労働者、港湾労働者、清掃労働者を除く）を含む。また、1970年から1990年までの数値では、工業部門に鉱業・鉱山、製造業、電気・ガス・水道、建築業を含む。同時期のサービス業には、仲卸・小売業、飲食業及びホテル業、交通・通信・倉庫業、金融機関・保険・不動産業・経営サービス業、社会及び個人に対するサービス業を含む。
- 7) 1996、1997年に筆者が聞き取りをした綿摘み労働者家族は、シャルウルファ県、アディヤマン県、ガジアンテップ県の出身であり、トルコ系、アラブ系、クルド系を含む。
- 8) トルコでは、1993年に、義務教育期間が、小学校（5年制）修了から、小学校（5年制）と中学校（3年制）修了へと、延長された。
- 9) 現在（2002年の時点）の南東部アナトリア地方の行政県は、ガジアンテップ県から分離したキリス県を含めた9県である。
- 10) 1995年の統計によると、トルコ全土での綿花栽培面積は、約756,694ヘクタールであり、そのうちアダナ県では、約139,120ヘクタールに及ぶ耕地で綿花が栽培された（*Agricultural Structure (Production, Price, Value) 1995: 6, 11*）。
- 11) 鋤入れの作業は、綿の種を撒く前後に草取りのために土を掘り起こす作業であり、手鋤で行われる。アダナ県では、4月から5月頃にかけて主として季節労働者が鋤入れの作業を行う。
- 12) アダナ県内の6農村とは、ユズバシュ、ザアルル、アリホジャル、イエニジェ、スルジャ、ヨルゲチエンの各村であり、1996年12月に各村の農民グループに対して筆者が綿花栽培と季節労働者に関する聞き取り調査を行った。
- 13) トルコの国立の初等学校では、頭をスカーフで覆って通学することは、事実上、禁止されている。それゆえ、小学校へ通学するときには、女子生徒はスカーフを着けないことが求められる。
- 14) *Türkçe Sözlük 1*, pp.113-114.（訳は星山幸子によ

- る。)
- 15) Ç村は、K県の県庁所在地であるK市中心部から車で5分程の場所にあり、1995年には、K市民のベッドタウンとして開発が進んでいるところであった。その宅地開発により、Ç村の村はずれに位置していた荒地に水道が引かれ始めていた。
- 16) トルコでは、1923年にトルコ共和国が成立した後、世俗主義が国是の一つとなった。つまり、オスマン朝がイスラームの宗主国であったのに対し、新生トルコ共和国は、脱イスラーム的な政策を打ち出していった。そのなかで、トルコ共和国の建国の父と呼ばれるムスタファ＝ケマル＝アタチュルクは、西洋的な衣服の着用をトルコ国民に奨励した。とくに、女性の「ヴェール」は、イスラームの後進性の象徴としてアタチュルクによって敬遠された（新井：214、Saeed: 160）。
- 17) 南東部アナトリア開発計画（GAP）は、チグリス・ユーフラテス両河川流域の灌漑、水力発電による電力の供給を主眼として1970年代にトルコの国家プロジェクトとして始められた。その後、1980年代には、GAP地域の社会経済開発プロジェクトとして位置づけられた。なお、同開発計画の水資源開発は、22のダムと19の水力発電施設の建設及び170万ヘクタールの土地の灌漑から成る。
- 18) 南東部アナトリア開発計画（GAP）が進む地域では、女性を対象とした社会教育プログラムが1995年からトルコ政府のGAP地域開発局により始められた。そのなかで、多目的コミュニティセンター（ÇATOM）の設置によって、女性の識字教育、保健、栄養、収入向上などのプログラムが施行されている。

参考文献

- Afshar, Haleh (ed.) 1991. *Women, Development and Survival in the Third World*. London: Longman.
- 新井政美. 2001. 『トルコ近現代史 イスラム国家から国民国家へ』みすず書房.
- Beneria, Lourdes (ed.) 1982. *Women and Development: The Sexual Division of Labor in Rural Societies*. New York: Praeger Publishers.
- Ener, Kasım. 1990. *Tarih Boyunca Adana Ovasına (Çukurova'ya) Bir Bakış* (『歴史のなかでアダナ平原（チュクロヴァ）に対する見方』) Adana: HÜRSÖZ Gazetecilik, Yayıncılık ve Matbaacılık.
- Finkel, Andrew and Nükhet Sirman (eds.) 1990. *Turkish State, Turkish Society*. New York: Routledge.
- Göle, Nilüfer. 1996. *The Forbidden Modern (Civilization and Veiling)* Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Glavanis, Kathy and Pandeli (eds.) 1989. *The Rural Middle East: Peasant Lives and Modes of Production*. London: Zed Books.
- Henderson, Helen Kreider with Ellen Hansen (ed.) 1995. *Gender and Agricultural Development: Surveying the Field*. Tucson: The University of Arizona Press.
- Hinderink, Jan and Mübeccel B. Kiray. 1970. *Social Stratification as an Obstacle to Development: A Study of Four Turkish Villages*. New York: Praeger Publishers.
- Ibrahim, Saad Eddin, Çağlar Keyder, Ayşe Öncü. 1994. *Developmentalism and Beyond: Society and Politics in Egypt and Turkey*. Cairo: The American University in Cairo.
- Keyder, Çağlar. 1988. "Türk Tarımında Küçük Meta Üretiminin Yerleşmesi (1946-1960)" (「トルコ農業において小規模換金作物生産の定着（1946-1960）」) in *Türkiye'de Tarımsal Yapılar (1923-2000)* 『トルコにおける農業構造（1923-2000）』 Şevket Pamuk and Zafer Toprak (eds.) Ankara:

トルコ農村社会における女性の劣位性とジェンダー分業

- Yurt Yayınevi.
- Keyder, Çağlar. 1989. "Social structure and the labour market in Turkish agriculture." *International Labour Review*, Vol. 128, No.6.
- Keyder, Çağlar and Faruk Tabak (ed.) 1991. *Landholding and Commercial Agriculture in the Middle East*. N.Y.: State University of New York Press.
- 中山紀子. 1999. 『イスラームの性と俗 トルコ農村女性の民族誌』アカデミア出版会.
- 松原正毅. 1986. 「価値観と評価 トルコ社会におけるナムスをめぐって」 『イスラーム・価値と象徴』(講座イスラーム4)板垣雄三(編)筑摩書房 pp.35-53.
- Madran, Nurettin. 1971. *Türkiye'de Pamuk* (『トルコにおける綿花』) Adana: T.C. Tarım Bakanlığı Bölge Pamuk Araştırma Enstitüsü Müdürlüğü, Yayın No.: 27.
- Morvaridi, Behrooz. 1992. "Gender Relations in Agriculture: Women in Turkey." *Economic Development and Cultural Change* 40 (3) 567-587.
- Morvaridi, Behrooz. 1993. "Gender and Household Resource Management in Agriculture (Cash Crops in Kars)" in *Culture and Economy (Changes in Turkish Villages)* ed. Paul Stirling. Cambridgeshire: The Eothen Press.
- 永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛. 1982. 『中東現代史I トルコ・イラン・アフガニスタン』山川出版社.
- Olson, Emelie A. 1985. "Muslim Identity and Secularism in Contemporary Turkey: "The Headscarf Dispute"." *Anthropological Quarterly* 58, no.4: 161-78.
- Pamuk, Şevket and Zafer Toprak (eds.) 1988. *Türkiye'de Tarımsal Yapılar (1923-2000)*(『トルコにおける農業構造1923 - 2000』) Ankara: Yurt Yayınevi.
- Saeed, Javaid. 1994. *Islam and Modernization: A Comparative Analysis of Pakistan, Egypt, and Turkey*. Westport, Connecticut: PRAEGER.
- シンクレア、セア、ナニカ・レッドクリフト編. 1994. 『ジェンダーと女性労働 その国際ケーススタディ』拓植書房.
- Soysal, Mustafa. 1993. "Yüreğir Ovasında Tarım İşçiliği ve Tarım İşletmelerinde İşgücü Sağlanması." (「ユレイル平原における農業労働と農業経営における労働力の供給」) *Çukurova Üniversitesi Ziraat Fakültesi Dergisi*, 1993, 8, (4) 15-26.
- Soysal, Mustafa. 1994. "Çukurova Bölgesinde Tarım İşçileri ve Çalışma Koşulları: Yüreğir Ovası Örneği." (「チュクロヴァ地方における農業労働者と雇用条件 ユレイル平原の事例」) *Türkiye 1. Tarım Ekonomisi Kongresi*(8-9 Eylül 1994, İzmir) 2.cilt: 192-199 (『トルコ第一回農業経済学論集』1994年9月8 - 9日、於イズミール、第2巻: 192 - 199)
- Stirling, Paul (ed.) 1993. *Culture and Economy: Changes in Turkish Villages*. Cambridgeshire: The Eothen Press.
- Şeker, Murat. 1986. *Türkiye'de Tarım İşçilerinin Toplumsal Bütünleşmesi* (『トルコにおける農業労働者の社会的統合』) Ankara: Değişim Yayınları.
- Spring Anita. 1995. *Agricultural Development and Gender Issues in Malawi*. Lanham: University Press of America.
- Spring, Anita (ed.) 2000. *Women Farmers and Commercial Ventures--Increasing Food Security in Developing Countries*. Boulder: Lynne Rienner Publishers.
- Tapper, Richard (ed.) 1991. *Islam in Modern Turkey: Religion, Politics and Literature in a Sec-*

ular State. London: I.B.Tauris.

Tekeli Şirin (ed.) 1990. *1980'ler Türkiye'sinde Kadın Bakış Açısından Kadınlar* (『1980年代のトルコにおける女性の視点から見た女性たち』). Istanbul: İletişim Yayınları.

Turkey: Women in Development. 1993. Washington, D.C.: The World Bank.

Tümertekin, Erol. 1964. "Changing Picture of Female Participation in Turkish Agriculture." *The Professional Geographer* Volume XVI, Number 2, March, 1964.

Yalçın, Ömer Faruk. 1980. *Çukurova Bölgesinde Mevsimlik Tarım İşçilerinin Sosyo-Ekonomik Sorunları Üzerinde Araştırma* (『チュクロヴァ地方における季節農業労働者の社会・経済問題に関する調査』). Ankara: Ankara Üniversitesi Ziraat Fakültesi Doktora Tezi (アンカラ大学農学部博士論文)

統計資料

Agricultural Structure (Production, Price, Value) 1995. 1997. Ankara: State Institute of Statistics.

1990 Census of Population (Social and Economic Characteristics of Population) 1993. Ankara: State Institute of Statistics.

1959 İstatistik Yıllığı (『トルコ統計年鑑1959』) 1961. Ankara: İstatistik Genel Müdürlüğü.

SEAP Provincial Statistics 1950-1994. 1995. Ankara: State Institute of Statistics.

Statistical Indicators 1923-1995. 1996. Ankara: State Institute of Statistics.

Türkiye İstatistik Yıllığı 1964/65 (『トルコ統計年鑑1964/65』). 1967. Ankara: Devlet İstatistik Enstitüsü.

Statistical Yearbook of Turkey, 2001. 2002. Ankara: State Institute of Statistics.

辞書

Türkçe Sözlük 1 (A-J) (Yeni Baskı) (『トルコ語辞典 1』)(新版) 1988. Ankara: Türk Dil Kurumu.